

優秀賞

電車でのできごと

静岡県 藁科中学校 二年 大棟 真衣

それは一瞬のできごとだった。無意識のうちの行動だった。

その日、私はぎゅうぎゅうと、これでもかというほど人が詰まった電車に乗っていた。私は始発から乗っていたことから、幸い座席に座ることができた。人が増えていく車内を横目に、座席に座れたことに喜びを覚えつつ、窓から見える景色に夢中になっていた。

人は絶え間なく増え続け、ついには、人と人とのすき間さえなくなっていく。電車がゆれるたび、ななめ前の女性が持つバッグに頭をぶつけそうになる。

ふと車内に目をやると、私の目の前に、大きな紙袋を手に提げたおばあさんが立っていた。腰が曲がっているため、つり革につかまることができず、片手で柱にしがみついていた。サラリーマンのような男性と大きなバッグにはさまれ、苦しそうな表情を浮かべている。

私は焦った。なぜなら、学校やまわりの人からは、「お年寄りには席をゆずる」という行為が正しく、あたりまえとされているからだ。

正直、私はこの席を手放したくなかった。満員電車という、ほとんどの人が座れない状況で、席に座っていられるという優越感を味わっていたかったのだ。

おばあさんと目が合いそうになったそのとき、私は顔を伏せ、目を閉じていた。ちらりとおばあさんの方を見ると、相変わらず苦しそうな表情で、小さくため息をついている。

(仕方ないじゃん。ほかの人がゆずればいい話だし)

頭の中で自分を正当化して心を落ち着かせた。

人が少なくなってきた電車の中で、私は苦しそうな表情を浮かべるおばあさんの顔が、頭から離れないでいた。

家に着いてからも、私は電車でのことで頭がいっぱいだった。悪いことをしてしまったという罪悪感と、自分は悪くない、と思う気持ちが混ざり合っている頭の中で、よく考え直した。私はどのような行動をとるべきだったのか。

本当はもうわかっている。私のしてしまったことは、人として恥ずかしい行為だ。「ほかの人も同じだから」といって、自分が動くことから逃げていたが、本当はおばあさんは困っていたのかもしれない。改めて考えると、ぎゅっと胸が痛くなった。

自分のほんの少しの行動で、相手を不快にさせてしまうことがある。だがそれと同時に、ほんの少しの行動で、相手をいい気持ちにすることだってできる。電車の中でのできごとで、私はそれを痛感した。だからこそ、同じ行動はくり返さないと心に決めた。

ほんの一瞬のことだったが、私は今でも後悔している。過去は変えられないけれど、いろいろな場面でたくさんの人に手を差しのべられる自分になるまで、あの日できなかった「親切」を、私はこれからの自分に託したいと思う。

そして、電車でのできごとは、私が大人になってもきっと忘れない。